# 書　評

## 平岡昭利編著：離島研究

海青社，2003，218 p.，2,800円（本体）
ISBN4-86099-201-6

おもしろそうな本がでた。編者の他10名の島好きな？学者によってまとめられた。一冊丸ごと島の本である。簡単に章構成を紹介したい。まず第1部は島の特性と結びつきと題され，第1章で全国の島嶼地域の計量的地域区分が試みられる。第2章では対馬・壱岐・五島列島を例に本土との結びつきが，第3章では奄美大島を対象に同郷団体の活動が論じられる。さらに，第4章では香川県伊吹島を例に漁民の移動が，第5章では座間味島を例に観光地化に伴う県外出身者の存在形態が論じられる。続く第2部は農業・牧畜の島々と題され，島の経済活動が農牧業の側面から検討される。第6章は沖縄県渡名喜・粟国島のキビ栽培，第7章は家島のキク・葉タバコ・肉用牛生産，第8章は隠岐・知夫里島の肉用牛経営が論じられる。最後が第3部であり，漁業・養殖の島々と題される。第9章では愛媛県越智諸島の延縄漁業が，第10章では離島でありながら人口の減らない福岡県小呂島の漁業が，第11章では宮崎県島浦島の巻網と養殖業が，第12章では家島諸島の漁業の史的な検討がなされている。

さて，本書の意義は現時点における地理学の離島研究を束ねたというところにある。古くから離島は地理学の興味深い研究対象の一つであった。1章の須山による記述を引くと「島嶼が周囲を海に囲まれ孤立的な存在であることから，地域性の解明を主要課題とする地理学にとっては取り組みやすい研究対象であったともいえよう。」ということがその最大の理由であろう。かくして離島は地域性の解明を目指す地理学にとっては常に魅力的な存在であり続けたのである。

しかし，対象の魅力的なことに対して，離島研究の方法論的な進展やテーマ設定の深化というものははたしてどれほどであったのかというと，少なからず心許ない。

その意味で，冒頭の章で須山が行っている島嶼地域の計量的地域区分は，島嶼地域の地域区分としては辻村・山口（1935a, b）以来の本格的な成果ではなかろうか。計量的手法による地域区分という方法は一時のブームが去って，最近あまりお目にかからないが，その手法のもたらした果実は充分に活用すべきである。本書の構成上，前座なのかもしれないが，こうした離島の地域区分の試みを高く評価したい。これなしには，2章以下のケーススタディは何の脈略も持たないことは言うまでもないが，加えて離島の地域区分が，「地域性の解明を主要課題とする上でその孤立的な存在ゆえに魅力的である」という特徴と相まって，本土側の地域の解釈においても有効な示唆に富むからである。

例えば，農業や漁業，あるいは観光業などの独自の展開により，人口減少に歯止めがかかった村や町は離島だけに限らない。あるいは，歯止めがかからないまでも，様々の第1次産業や観光開発，あるいは地方の小規模中心地としての命脈を保とうとしているところは日本各地にみられる。そうした地域の姿が，「周囲を海に囲まれ孤立的な存在」としての離島研究を通じて描かれると，地域の姿がより鮮明に浮かび上がると感じるのは評者だけではあるまい。それらの問題がひとえに離島に限ったことではないということは至極当然のことではあるが，それが離島の姿として描かれると，われわれがおそらく無意識的にもつ離島のイメージと呼応して，何かひどく象徴的に描かれてしまうからである。

いずれにしても，この地域区分は，離島の地域区分であると同時に，わが国の農山漁村部の地域区分にも十分通用する視座を持つものであることには違いない。本地域区分で得られた漁業，小規模中心地・製造業立地，農業，観光，公共投資依存，工業特化という7つのキーワードは，離島に限らずわが国の農山漁村振興のキーワードでもある。むしろ，「周囲を海に囲まれ孤立的な存在」としての島嶼ゆえに問題がより先鋭化されて描かれるのかもしれないが，「それぞれの環境や資源を活用した産業基盤を備え」，「近代化の牽引役となった産業が立地した」島嶼の姿は，ある意味で明治以降の日本に共通する姿でもある。あえていうなら，そもそも，本州にしても，北海道にしても，九州，四国にしても所詮島嶼である。

一方，先の7つのキーワードからも明らかなように本地域区分は経済的指標に重点をおいた区分でもある。経済指標だけで離島を区分することが適当かどうかという議論は確かに存在するであろう。確かに従来の区分では民俗的観点からのものや，地形的な観点，あるいは単に瀬戸内とか南西諸島，あるいは日本海とか太平洋とかの位置的な区分が広くみられたわけであり，それらの指標が採用されていないのは不思議といえなくもない。しかし，あえていえば，このような経済的

島嶼区分が今まで無かったことのほうがもっと不思議である。

以上の地域区分を始め，本書に収められた多くの論文は，経済的な観点を主にしてまとめられている。その反面，従来の離島研究において大きなシェアを有していた民俗的な論考はほとんどみられない。かつての九学会連合の調査などでは奄美や対馬，佐渡など離島が主要な調査地であったし，奄美，沖縄の島々とくれば格好の写真集のモチーフであったことを思い起こすと，やや物足りなさを感じないわけではない。

しかし，それは逆に健全な島嶼地域へのまなざしであるのかもしれない。かつて出版された多くの離島の写真集，特に南西諸島のそれに評者はある種のまなざしを感じていた。それは他者を見るというまなざしである。もっといえば異形を見るまなざしであり，異形を見るために意図されたまなざしである。それらの写真集の出版は記録を残すという作業なのであるが，そこに自分たちと異なるものを物珍しそうに見るというまなざしがありはしないか。まなざしに高い低いは有りはしないか。取材や調査という「錦の御旗」を掲げて彼らを写したのではないか。そういうことを常々感じていた。幸か不幸か，写真集の被写体となった彼らの表情からは写されるということに対する何の屈託も評者には読みとれなかった。しかし，これらの写真は明らかに外部の者が写した写真であり，写した側にとっては被写体の世界が「よその」世界となる。評者はそこに何かしら越えがたい違和感を感じていたのである。

この写すものと写されるもの，調査者と被調査者の垣根をどうこえていくのか，それは調査者，研究者としての自分自身の課題でもあった。しかし，本書にはかつての南西諸島の写真集に評者が感じたようなまなざしはない。むしろ，本書は離島を他者とみるのではなく，現在の経済環境の中でどのように地域が存立するのかという自分自身に共通する対象としてみている。経済環境を対象とすることで読者の世界と共通のテーマ，あるいは読者の世界に連結する離島の姿を描くことが可能になっている。その意味で本書のまなざしは，従来の離島研究とは異なり，地味ではあるが堅実な観点を有していると評者は考える。

例えば，河原の論考はテレポーテーションのように遠隔地とつながる離島の社会経済的結びつきを描いていておもしろい。島民の移動先の分布は海に囲まれた島ゆえ，船を使った移動ゆえの妙味であり，海上に無数に張り巡らされた漁民・島民のネットワークを浮かび上がらせている。また，ダイビングショップ経営者や「ヤマト嫁」に関する細かな調査とその整理を行った宮内の論考は，一方でさらに抽象化した議論に踏み込んでほしいという感想を持つものの，本土との関わりの中での島社会の変容を淡々と描き出している。

その一方，本書の論考の中には，「たまたま研究対象地域が離島であった」的な印象を受けるものもないわけではない。その論考で導かれるのと同じ結論が，本土側の漁村や農村，あるいは観光地で行われた同じような調査から導かれるのであれば，それは「離島研究」といえるのだろうか。たまたま離島で行った研究ではなく，離島だからこそ行った研究を読者はこの本に期待しているはずである。そして，離島であるがゆえに，本土にも還元できる視点をより先鋭化して提示しているのだという結論を，あるいは（その周囲を海に囲まれたという）孤立的な存在であるがゆえに，（地理学の主要課題である）地域性の解明に大きな貢献をしたのだという成果を期待しているはずである。

## 文　　献

辻村太郎・山口貞夫（1935a）：日本群島付近に於ける島嶼の分類および分布(1)．地理学評論，11，pp. 703-728.

辻村太郎・山口貞夫（1935b）：日本群島付近に於ける島嶼の分類および分布(2)．地理学評論，11，pp. 794-808.

（荒木一視）